

## 編集後記

小林 広幸 福岡山王病院消化器内科

ここ数年、本誌において臓器別に特集してきた知っておきたいまれなもののシリーズの大腸バージョンである。本誌の愛読者であれば、昨年、大腸悪性腫瘍のまれなものの(51巻3号)が組まれたことから、早晩、本号(大腸良性疾病)が出ることは予想されていたであろう。以前に特集した食道と胃のシリーズでは良性・悪性疾病は分けずに特集号が組まれていたが、なぜ大腸は良性と悪性の2本に分けて特集されたのであろうか。それは、主題の3論文(小林, 清水, 八尾論文)にも列記されているように、大腸では良性疾病(特に非腫瘍性疾病)が多種多様でまれなものも少なくないことに加え、まれながらも知っておいてほしい疾患が多く存在するからである。

主題論文ではこれらの大腸良性疾病を良性腫瘍・腫瘍様病変の画像診断(小林論文)、非腫瘍性疾病の画像診断(清水論文)および良性疾病の病理診断(八尾論文)の立場から解説いただいたが、本号も含め、これまでの食道、胃のまれなもののシリーズの主題でも問われているように、何ををもって“まれ”とする(定義する)のか、一般的には臨床で遭遇する頻度が低いということであろうが、その頻度を正確に求めることは極めて困難であり、まれの定義は各著者の判断に委ねられている。また、大腸の良性疾病の中には、若年性ポリープに代表される過誤腫のような腫瘍様病変のほかにも、腸管子宮内膜症やinflammatory myofibroblastic tumorなどの腫瘍・非腫瘍(炎症性疾病など)のいずれに分類されるのか判然としない疾患もある。本質的には良性の腫瘍(様)疾患ではあるが、腺腫に代表されるように、多くの疾患はまれに悪性化するポテンシャルも有している。小林論文ではまれな良性の腫瘍(様)疾患について、主観的(経験的)な頻度

に加え、比較的ありふれた疾患でも非典型的な形態や非好発部位に生じた病変は知っておきたいまれな疾患と捉え、その画像診断を鑑別すべき疾患との比較も含め解説している。清水論文では著者の豊富な知識と経験から多種多様な非腫瘍性疾病を網羅的に分類(**Table 1**の分類表のまれな疾患一覧のみでも十分一見の価値あり)し、総論的に簡潔に解説いただくとともに、まれな疾患でありながら特徴的な画像を呈する病変については臨床病理学的所見も含め提示している。病理の八尾論文では、著者の経験からまれと思われる疾患(年間数例程度遭遇する疾患)のうち、生検診断が有用なもの(確定診断または疑診の所見が得られるもの)についてピックアップし、解説されている。

後半では、主題症例として、初級から中級の消化器医にぜひ知っておいてほしい特徴的な画像所見や、特定部位に生じる代表的な疾患を取り上げ、個々の疾患の画像および病理組織学的所見の特徴を詳述している[腫瘍性(様)疾患ではcolonic muco-submucosal elongated polyp(石原論文), pyogenic granuloma(大庭論文), 神経系腫瘍(perineuroma: 村上論文), 肛門管尖圭コンジローマ(上田論文), 非腫瘍性疾病のpseudolipomatosis(清水論文), 多発病変(ポリポーシスなど)を特徴とするCowden病(米野論文), Cronkhite-Canada症候群(平田論文), blue rubber bleb nevus syndrome(佐野村論文)]. 加えて、早期胃癌研究会症例として、限局性アミロイドーシスも本特集号に合わせて掲載いただいている。ぜひとも一読していただきたい。

冒頭の序説(斉藤論文)で述べられているように、本誌が診断困難・不明の大腸疾患に遭遇した際に再読され、診断の糸口となれば幸いである。